経口避妊薬服用後の妊娠に関する疫学調査

集計代表機関
京都府立医科大学産婦人科学教室
集計責任者　岡田弘二
集計担当者　東山秀聲

調査目的

経口避妊薬服用婦人が避妊薬服用中止後に妊娠した場合，避妊薬に含まれるprogestogenやestrogen，あるいは両者の影響が中止後にも及び，服用中止後の早期の1～3カ月間は月経不順となり，とくに卵胞期が延長することが多い。正常排卵周期とは異なると考えられる，このような内分泌環境下で妊娠した場合，卵胞期の延長にともなう変性卵の受精などにより，児の奇形の出現が懸念される。その因果関係を明らかにする目的で臨床的な検討を行なった。

調査方法

各研究機関に，各種の経口避妊薬服用中止後の妊娠例につき，妊娠時期，妊娠経過，分娩，児の所見などのアンケート調査を依頼し，回答をえた6機関，44例について分析を行なった。なお分析にあたり，今回は症例数の関係から年齢のみをマッチさせた。

調査成績

使用された経口避妊薬は8種類である。そのうちわけは，オビューレン11例，リンデオール8例，アノブラール6例，ソフィアAとノアルテンD_1 4例，ネオギノン2例，およびE・Pホルモン1例，オビューレン50　1例であり，薬剤の不明が11例あった。

今回の妊娠成立，すなわち最終月経前1年間の服用月数は1～3カ月のものが8例，4～6カ月が6例，7～12カ月が15例，13カ月以上が13例，不明が2例であった。

服用中止後妊娠までの月数は，経口避妊薬服用中が1例，1カ月未満が4例，1～3カ月が13例，4～12カ月が16例，13カ月以上が5例，不明5例となった。

妊娠中の合併症は，切迫流産，貧血症および妊娠中毒症軽症が主なものであったが，経口避妊薬服用婦人と非服用の対照の間には有意差は認められなかった。

各年齢層における分娩時の出血量は図1に示した。各年齢層とも経口避妊薬服用婦人の方が対照よりも一般に少なく，とくに25～29才と30～34才の2つの群で服用婦人はそれぞれ1931±29.4，193.0±30.6　対照はそれぞれ370.1±52.5，271.0±45.5となり，服用婦人の方が有意に少なかった。しかし今回の調査では集計できた症例数が少なかったため，対照とマッチさせたのは年齢のみであり，経産回数をマッチさせて比較，分析を行なっていない。したがって分娩時出血量が経口避妊薬服用中止後の妊娠，それに続く分娩で非服用婦人より少なくなるという結論をだすことはできない。

分娩時間についても出血量でのべたと同じ理由で結論をくだすことはできなかった。

新生児数は44例であり，前述の服用中に妊娠した症例を含めて，奇形は1例も認められなかった。新生児の性別は男児17例，女児24例，記載もれ3例となり，女児の出生が多くなった。

胎盤重量は図2に示した。各年齢層とも経口避妊剤服用婦人と対照とした婦人の間に著しい差は認められなかった。

新生児の生下時体重を，母親の年齢別に分類して示したのが図3である。

児の生下時体重は経口避妊薬服用を行なった産婦

と対照の産婦の間には，各年齢群とも有意な変化は認められなかった。

新生児の身長は対照と比較して著変はみられなかった。Apgar scoreは経口避妊剤服用婦人，対照婦人の両群から出生した児はすべて8点以上であった。

む す び

以上6機関から回答が寄せられた経口避妊薬服用の妊娠，分娩例，44例について妊娠経過，分娩経過ならびに出生児の異常の有無を分析した。今回は妊産婦の年齢のみを対照とマッチさせて分析を行なった結果，経口避妊薬服用後に妊娠，分娩した婦人の分娩は出血量が，対照よりも一般に減少する成績がえられた。しかし経産回数をマッチさせて対照と比較検討を行なっていないから，服用婦人の分娩時出血量が減少するという結論はえられなかった。分析を行なったその他の項目は経口避妊剤服用後の妊娠例と対照の間には特に差は認められなかった。今後さらに症例数を増して詳細な分析が行なわれなければならない。

資料提供機関

東北大，山形大，東京大，金沢大，広島大，京都府立医大，各産婦人科

図1. 分娩時出血量

年　令	経口避妊薬服用婦人	対　照
20－24	212.5±71.5(g)	303.7±101.4(g)
25－29	193.1±29.4	370.1±52.5
30－34	193.0±30.6	271.0±45.5
35－	－	206.8±48.2

MEAN±SE

図2. 胎盤重量

年　令	経口避妊薬服用婦人	対　照
20－24	552.5±29.3(g)	554.2±53.0(g)
25－29	580.7±55.0	524.0±19.2
30－34	591.7±31.1	553.5±33.3
35－	－	655.0±66.4

MEAN±SE

図3 新生児の体重

年　令	経口避妊薬服用婦人	対　照
20－24	3016.7±105.6(6)(g)	3050.8±172.4(6)(g)
25－29	3156.1±668(19)	3161.4±905(21)
30－34	3260.8±197.5(13)	3056.5±456.7(13)
35－	3550 (2)	3105.0±148.6(4)

MEAN±SE　(　) 例数

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

調査目的

経口避妊薬服用婦人が避妊薬服用中止後に妊娠した場合,避妊薬に含まれるprogestogenやestrogen,あるいは両者の影響が中止後にも及び,服用中止後の早期の1〜3カ月間は月経不順となり,とくに卵胞期が延長することが多い。正常排卵周期とは異なると考えられる,このような内分泌環境下で妊娠した場合,卵胞期の延長にともなう変性卵の受精などにより,児の奇形の出現が懸念される。その因果関係を明らかにする目的で臨床的な検討を行なった。